

# 男長

## ひとりごと

53

齊藤 讓

たまきはるいのちの旅に  
吾を待たす君にまみえむ  
あすの喜び

この和歌は、ご成婚を明日に控えた昭和三十四年四月九日に、美智子皇后が天皇陛下への返歌として詠まれたものである。尤も、これは私も渡辺みどり氏著作の美智子皇后「いのちの旅」という本で知ったことである。

性があるものかという驚きでいっぱいであった。▼当時の日本は岸内閣の時代で、戦後復興から独自の歩みをはじめようとする時期であり、このすぐ後には六十年安保闘争が火を吹き国内は騒然となるのである。そしてこの後に池田内閣の所得倍増計画が登場してくるといって時代背景であった。

お二人のロマンスは、軽井沢でのテニスから生まれたころ

▼昭和三十四年四月といえは遙遠い日のことであるが、私にとっては高校に入学した時点で、テレビ中継された祝賀パレードのあの熱狂的な場面が、今でも脳裏に鮮明に焼付いている。民間人からはじめての妃殿下ということに加え、美智子さんの聡明で清純な美貌は、たちまち国民の心をとらえて一大「ミッチーブーム」

と誰れでもよく知るところであるが、ご結婚までにはかなりの紆余曲折があり、ご本人はもとより正田家の苦悩も並大抵のことではなかったようだ。前述した「いのちの旅」は、このへんの事情やご結婚後の美智子皇后のご心労を語っているのである。

▼冒頭の和歌のたまきはるは、

が涌きおこった。高校生の私には、ひらかれた皇室という漠然とした印象と同時に、世の中にはこんなにも美しい女

いのちの枕詞であり、美智子皇后はこれから始まろうとする結婚生活を「いのちの旅」と表現されたのであるが、ど

こいのちがけの悲壮な決意が伝わってくるようである。この本の中から、いくつかのことを拾ってみる。

まず、このご婚約問題は、国会の衆議院内閣委員会でもとりあげられ、自民党平井義一代議士が次のような質問をした。「もし伝え聞くように皇太子殿下が、軽井沢のテニスコートで見そめて、自分がいいというようなことを言うたならば、それはここにおら

### いのちの旅

れる代議士さんの子供さんと変りがない。これが果たして民族の象徴といえるかどうか。あなたから進言されたものか、殿下が自分で見せられたものか、この点をおたずねしたい。

ご婚約発表のあと、評論家の大宅壮一が、「二十四歳の優等生ぶりなど、今に何の役にも立たなくなる。」と喝破したとりの世界であったよう

い。これに対して宇佐美毅宮内庁長官は、次のような答弁をしている。「今回、内定になりました方について、世上一昨年あたりから軽井沢あたりで恋愛が始まったというようなことが伝えられていますが、その事実は全くござい

ません。もちろん軽井沢でテニスを一、二度なされたことは事実でございます。しかし、それ以上の交際があったわけではもちろんございません。」

富美子さんは、美智子さまが皇后になられたのを見ることなく世を去った。この心情は、吉川英治の句を思い浮かべさせた著者はいう。

菊つくり咲き揃う日は  
美智子皇后は、皇后になられたとき次のような思いを語られた。「両親のもとで過ごした年月より、さらに長い年月が過ぎたことを思うと、やはり深い感慨を覚えます。まさに、万感の思いがこめられたお言葉である。

曾って昭和天皇がご学友に對して「君達は定年があつていいネ。私は死ぬまで一生天皇でいなければならぬ。」とお話しにいられたというが、重い一言であると思ふ。

▼美智子皇后の、あの穏やかで慈母観音のようなお姿は、厳しく険しい幾つもの山路を越える「いのちの旅」の果てにつくり、磨かれてきたものであり、そしてそれが秋篠宮妃殿下紀子さんの誕生という花を咲かせたのではないかとこの一冊の本を読んで私は思った。

いのちがけの人生。それは美しい老いを約束する。